

今週の為替相場見通し(2020年8月17日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		105.72 ~ 107.05	106.59	105.50 ~ 107.50
ユーロ	(ドル)		1.1711 ~ 1.1864	1.1843	1.1700 ~ 1.1950
(1ユーロ=)	(円)		124.36 ~ 126.75	126.22	125.00 ~ 127.50
英ポンド	(ドル)		1.3006 ~ 1.3143	1.3086	1.3000 ~ 1.3200
(1英ポンド=)	(円)	*	138.11 ~ 140.21	139.51	138.00 ~ 141.00
豪ドル	(ドル)		0.7109 ~ 0.7189	0.7171	0.7100 ~ 0.7250
(1豪ドル=)	(円)	*	75.69 ~ 76.72	76.44	75.70 ~ 77.20

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 上野 智久

(1) 今週の予想レンジ: 105.50 ~ 107.50 円

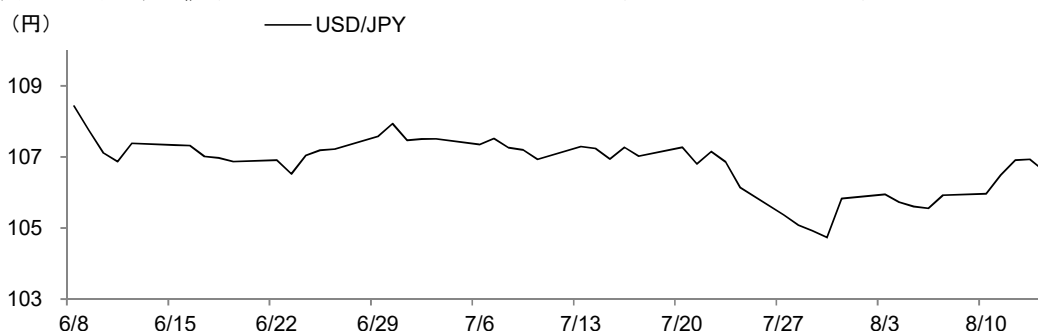
(2) ポイント【先週末までの回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は上昇する展開。週初10日、105円台後半でオープンしたドル/円は序盤は東京休日で薄商いの中、動意に乏しい推移。米国時間にトランプ米政権による香港政府関係者への制裁に対して、中国側が複数の米議員に制裁を科したとの報道に米中関係悪化の懸念が高まり、リスクオフのドル買いから106円台前半まで上昇するも、米金利低下を背景に一時週安値となる105.72円まで下落した。翌11日は、米7月生産者物価指数(PPI)の良好な結果や米金利上昇も相俟って、ドル/円は106円台後半まで上昇。12日には、米7月消費者物価指数(CPI)の結果を好感すると、ドル/円は107台に乗せたが、その後は米追加経済対策への期待感が後退すると、106円台後半で上値重く推移した。13日は、米金利上昇を背景に、ドル/円は一時週高値となる107.05円をつけるも、売り意欲も確認される中、106円台後半に押し戻された。14日は序盤に107円台をつける場面も見られたが、上値追いつとはならず。欧州株が軟調な推移となり、米7月小売売上高の結果は市場予想に届かず。ドル/円は106円台半ばまで反落する展開となった。結局106円台半ばで越週している。

今週のドル/円は動意薄の展開を予想する。市場の主要なテーマは新型コロナと経済への影響、米大統領選と米中問題という状況に変化はない。ウイルスも選挙もいずれも先を見通しにくいテーマであり、ヘッドラインに起因した一喜一憂はあっても短期的に大勢が判明する性質のものではない。加えて、日米は緩慢な金融政策・積極的な財政政策を行っており、同じ性質を持ったドルと円が大きく水準を変える展開は想定しにくい。足元は107円付近では上値の重い展開となっているが、かといってドル売り地合にも一服感が見られる中で、再度下値を攻める状況にもないのでは。ドル/円については106円台半ばから107円台前半での膠着間の強い展開を予想している。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(8/10~8/14)の値動き: 安値 105.72 円 高値 107.05 円 終値 106.59 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 原田 和忠

(1) 今週の予想レンジ: 1.1700 ~ 1.1950 125.00 ~ 127.50 円

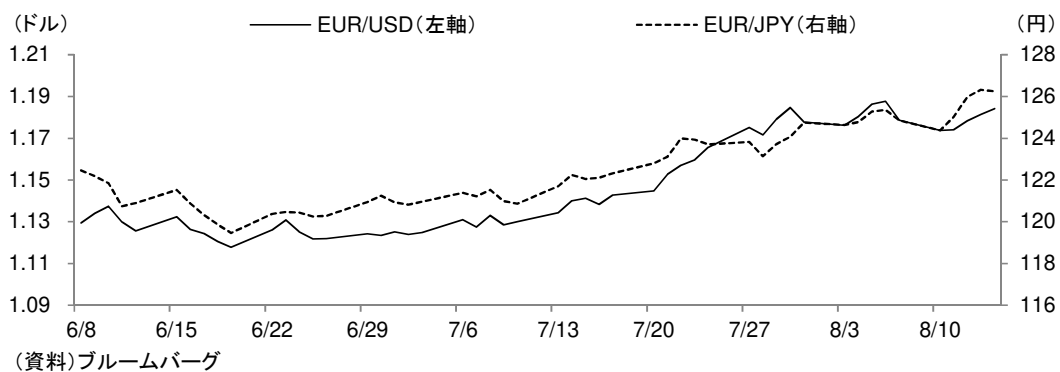
(2) ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、揉み合う展開。週初10日、1.18付近でオープンしたユーロ/ドルは、ドル買い優勢地合いに1.17台半ばまで下落。その後米金利の低下によって一時値を戻したものの、米金利が上昇に転じると、ユーロ/ドルは1.17台前半までじりじりと値を下げた。翌11日には、独8月ZEW期待指数の良好な結果を好感すると、ユーロ/ドルは1.18台前半まで上昇したが、戻り売りや米金利上昇を背景に1.17台前半まで押し戻された。12日にかけて、ユーロ/ドルは一時週安値となる1.1711をつけたが、米財務長官の米減税政策への期待感が後退すると、ドル売りが強まり1.18台前半まで急伸。13日には、ユーロの買戻しやリスク志向のドル売りが強まると、ユーロ/ドルは一時週高値となり1.1864まで上昇した。その後は、米金利上昇を背景にドル買いが強まり、ユーロ/ドルは1.18台前半まで買い戻された。14日は、1.18台前半の同水準で底堅い推移し1.1843で越週した。

今週のユーロ/ドル相場は引き続き上値の重い推移を予想。ユーロ圏の経済指標は徐々に明るい兆しが出ており、独8月ZEW景気期待指数は予想55.8に対し、71.5と上振れ。実体経済回復の期待感が高まっている。復興基金合意を受けた楽観的な見方も直近のユーロにはサポートとなっていた。一方で、最高値圏を維持する米国株式に比し、欧州ストックスの伸び悩みには留意したい。米国株式はテック関連やバイオ関連株を中心に指数をけん引しているものの、欧州株は消費財や輸送機器関連の伸び悩みにより新型コロナショックから戻し切れていない。かかる状況下、6月から買われてきたユーロは、相応のロングポジションが積み上がっており、利益確定売りのユーロ売りによる上値の重い展開が継続しそうだ。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/10~8/14)の値動き: (対ドル) 安値 1.1711 高値 1.1864 終値 1.1843
(対円) 安値 124.36 高値 126.75 終値 126.22



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.3000 ~ 1.3200 138.00 ~ 141.00 円

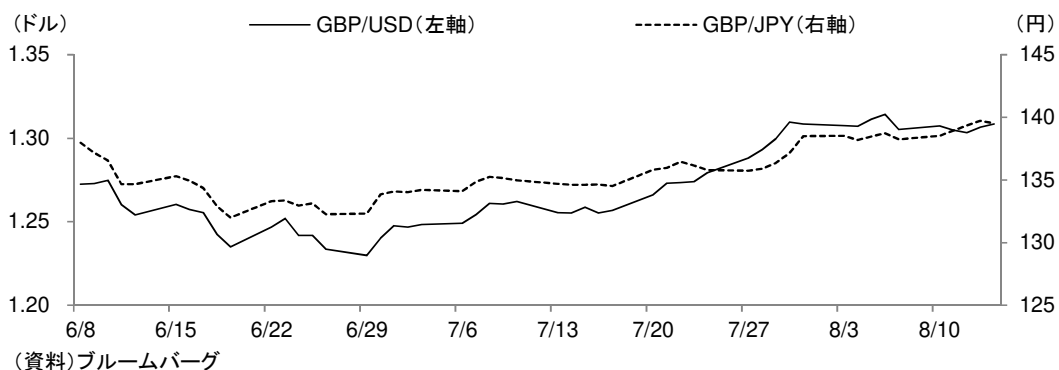
(2) ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対円ではじわじわと水準を切り上げ、一時、5か月半ぶりの140円台まで上昇したが、対ドル、対ユーロでは、細かい上下動を繰り返し、振り返って概ね横這いに終わった。円はこの間、対ドル、対ユーロでも、明確に水準を切り下げており、円全面安と言える推移を見せた。11日に発表された米7月PPIの上振れ、11~13日に実施された史上最大規模の米国債入札の不調などを要因に、米を始めとした主要国の長期金利が軒並み上昇したことが、円全面安を招いたものと考えられた。長期金利上昇や、イールドカーブのステイプニングは円にも波及したものの、日銀によるイールドカーブ・コントロールという縛りがあることや、実際、(長期)金利の上昇幅が明確に小幅だったことが、円の「弱み」と読まれたようだ。英固有の要因では、12日の英国時間早朝に発表された一連の英経済指標が、ポンド下押しを誘ったのは、値動き(とりわけ対ユーロでの明確な下押し)から判断して、おそらく間違いない。ただ、統計などの部分がポンド売りを誘ったかは、定かではなかった。英6月製造業・鉱工業生産は、まちまちと言える数字だったし、同貿易収支はむしろ強めの内容と言えた。英4~6月期GDP暫定値の前期比-20.4%の落ち込みは、確かに衝撃的と言える弱さだったものの、4~5月の概ねを占めたロックダウンを考慮すれば当然の数字と言えたし、市場の予想にも沿った内容で、敢えてポンドを売り込む程の数字とは考え難かった。

今週の英ポンド相場は、方向感に乏しい足下膠着の継続を予想。対円で140円台にしっかり乗せてきたり、対ドルでも3月の急落直前の高値(1.3200)を上抜けたりすれば、もう一段水準を切り上げる展開は想定できなくもないが、テクニカルな要因(新値更新に伴う損失確定のための買いなど)以外に、そこまでのポンド堅調を見込む材料を思いつかない。13日の現地時間夜、英運輸省は、スペイン、ルクセンブルグ、ベルギーなどに加え、新たにオランダ、フランスなどからの入国者に14日間の隔離を義務付ける措置を講じた。英との比較で、Covid-19新規感染者の増加が著しいことがその理由だが、14日に観察された(特に対ユーロでの)ポンド上昇は、或いは、Covid-19被害の彼我の差(多くのユーロ圏加盟国よりも英の方がまし)を反映した可能性も考えられなくもなかった。ただし、こうした措置は、経済への影響という意味では、英観光業/輸送業にも間違いなく大きな打撃を与えるはずだし、実際にこの局面のポンド高は長続きしなかった。今週は17日(月)から英とEUの将来関係交渉が再開されるものの、同交渉の正念場は10月以降と見られており、目先、大きな進展を見せる可能性は高くない。英経済指標も、17日(日)に英7月CPI、21日(金)に英7月財政収支、同小売売上高などの主要マクロ経済指標の発表が控えるものの、こちらも、「英経済の正念場は、(一時帰休制度などの)経済刺激策が終焉する10月末以降」との見方が支配的で、余程意外感の強い数字でも見ない限り、目先の数字の動静にポンドが反応する展開は考え難い。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/10~8/14)の値動き: (対ドル) 安値 1.3006 高値 1.3143 終値 1.3086
(対円) 安値 138.11 高値 140.21 終値 139.51



4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 松本 奈保輝

(1) 今週の予想レンジ: 0.7100 ~ 0.7250 75.70 ~ 77.20 円

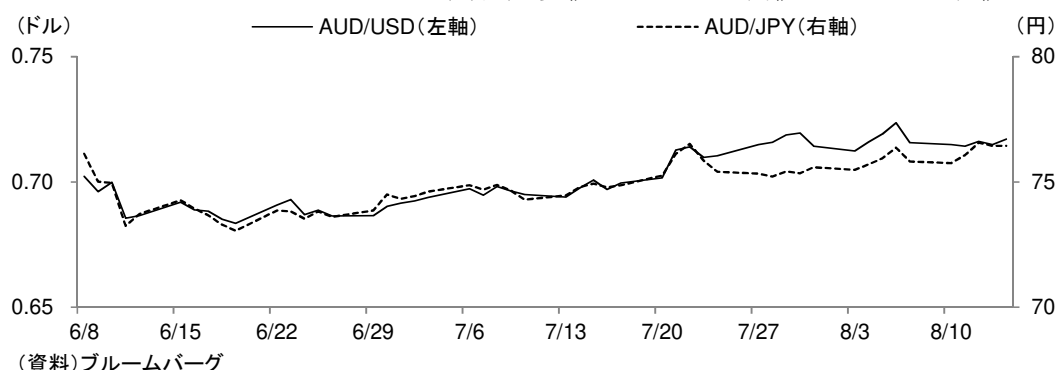
(2) ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは週を通してほぼ横ばいの展開となった。週初10日は日本、シンガポール休場の中、0.7140-0.7184の狭いレンジ推移。アジア時間では0.71半ばで推移し、ロンドン時間では0.7140まで下落するも、アザー米厚生官庁の台湾訪問で米中対立が新たな局面に入ったことを受けてドル売りとなり豪ドルは0.718台前半まで上昇した。11日は往つて来いの展開。0.71台半ばで始まった豪ドルは豪7月NAB企業景況感が前回値を上回りやや上昇。ロンドン時間に0.718後半まで上昇した後はドル買いとなり豪ドルは0.71半ばへ戻した。12日はニュージーランド準備銀行(RBNZ)金融政策発表で政策金利は市場予想通り0.25%に据え置きされたものの、資産買い入れ額が拡大される等予想外の追加緩和を受け、発表直後NZD売りで豪ドルもつれ安となり0.7140前後から0.71台前半まで下落した。その後は資源価格が大幅反発する動きに0.716台まで値を戻した。13日は0.716近辺でオープン。豪7月雇用統計が市場予想比良好な結果となったことを受け、豪ドルは0.7170近辺から0.7190手前まで上昇したものの、NY時間にかけては人民元の下落や資源価格の下落等を横目に0.713半ばまで下落した。14日は0.715近辺でオープン。0.74近辺に下落する場面はあったものの、前日の良好な雇用情勢が意識されてか豪ドル底堅い展開。一方、週の高値も超えることなく高値圏の0.7171でそのまま越週した。

今週の豪ドル相場は底堅い展開を予想。前週に発表された豪7月雇用統計が予想を上回る内容となったことで豪州準備銀行(RBA)の追加緩和観測が後退していることやロウRBA総裁が先週14日の議会証言で豪ドルの下落を望むとはしながらも「現在の水準は過大評価されているとは言えず、為替相場を押し下げるために介入する用意はない」としていることも豪ドルの下値を支えそうだ。一方、新型コロナウイルスの影響で豪州の景気見通しが悪化していることや、豪州国内の新型コロナウイルス第二波感染拡大によるロックダウンが長期化することによって経済指標の悪化も懸念されている。加えてRBNZが前週の会合で政策金利は据え置いたものの、資産買い入れ規模の拡大を決定しており、豪ドル上昇する場面ではこれらが意識され上値を限定させる動きも出てくるとみている。重要指標としては18日(火) RBA理事会議事要旨(8月4日開催分)の発表が予定されている。国内総生産(GDP)見通しの下方修正や失業率が複数年にわたり高止まりするとの見方は示されているものの、慎重な見方がより台頭すれば豪ドルは買いづらくなる可能性もでてくる。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/10~8/14)の値動き: (対ドル) 安値 0.7109 高値 0.7189 終値 0.7171
(対円) 安値 75.69 高値 76.72 終値 76.44



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。